

〔紹介〕

和田敦彦著『読書の歴史を問う 書物と読者の近代』（改訂増補版）

芹澤 珠 奈

本書は、近代以降の日本を対象として、読者および読書の歴史について調べる方法、調べる意味、そして読書をめぐる様々な研究がどのように関係しあっているのかを、実践的かつ体系的に記述したものである。章立ては左記の通り。

- 第一章 読書を調べる
- 第二章 表現の中の読者
- 第三章 読書の場所の歴史学
- 第四章 書物と読者をつなぐもの
- 第五章 書物が読者に届くまで
- 第六章 書物の流れをささぎる
- 第七章 書物の来歴
- 第八章 電子メディアと読者
- 第九章 読書と教育

第十章 文学研究と読書

第一章では、読書の歴史についてどのように追求するべきか、次章以降で様々な観点からとらえるにあたり手がかりが示されている。著者の和田氏によると、読書は書物が読者にたどりつき理解されていく一連のプロセスとして捉えることができ、「理解するプロセス」と「たどりつくプロセス」という二つのプロセスに分けて考えられるという。なお、第二章より「理解するプロセス」を取り上げており、第三章から第八章にかけて「たどりつくプロセス」について、章ごとにそれぞれの観点や要素にわけて取り上げている。本書では、このようなプロセスを細分化、階層化して考えることを提唱している。

第二章では、「理解されるプロセス」について、書物とそれを読み理解する読者との関係をとらえる方法や、事例

について紹介されている。新聞や雑誌に焦点をあて、書物の多様な表現形式が及ぼす読者集団への影響や、表現を享受することでのどのような読者の構成になるかという課題について、明治時代の女性雑誌や新聞小説、占領期における日本の児童雑誌を例に挙げ、読者集団の間に生まれる格差や差別を歴史的にとらえている。

第三章では、読書をする場所について取り扱われている。鉄道や図書館、監獄や戦場など具体的な場所を挙げながら、読書空間の歴史を紐解いている。

第四章と第五章では、書物と読者とのつながりを作り出し支える活動をする人や組織、販売や流通の歴史について目を向け、それらを調べ、とらえていくための方法やその意味、役割について取り上げられている。

第六章では、書物が読者にいたる流れを制御しようとする活動について、戦前、戦中、戦後の検閲を例に挙げ説明されている。書物が読者へといたる流れがどのように形成、変化してきたのか、またその流れのどの部分が、何によってどうさえぎられてきたのか、書物の流れが受ける管理や制約について考えることができる。

第七章では、蔵書の歴史について取り上げられている。書物の移動や消失・喪失を、異なる地域間や各国の文化発信という視点から、時空間を移動する書物と読者の関係も

ふまえつつ解説している。

第八章では、電子メディアについて取り上げられている。紙媒体から電子化されることで変化するプロセスや、書物と読者との関係について理解することができる。

第九章では、読書と教育を結び付け、国語教育や教材の歴史を基に、そこから作り出される読む能力、読書のイメージの変遷、資料を適切に保存し公開していく記録史料学、メディア・リテラシーについて取り上げられている。

第十章では、和田氏が研究を始めた当時の文学研究の状況、その後の研究方法の展開、流れを追いながら、読書という問題がそこにかかわってくるのかまとめている。

本書の「おわりに」に「本書は、こうした読書の歴史に関わる多様な問いを調べ、考えるための実践的なマニュアルのようなものだ。」という記述があるように、時空間を越えた先行研究や事例が多岐にわたりに示されている。今後の読書研究や、より豊かな読書体験に役立つ一冊だといえる。

(文学通信、二〇二〇年八月、三二八頁、一九〇〇円＋税)

(せりざわ・たまな 本学日本語日本文学科二年)